

遠くにとどく言葉で人びとを結ぶ

福島核災棄民——町がメルtdownしてしまった

〈核災棄民〉とはなんと鮮烈な言葉だろう。作家の辺見庸氏は3.11後、日本語の「言葉が出来事からおいていかれ、ひきはなされてしまう」と厳しく指摘した。そなかで、福島核発電所から25キロ地点にいる詩人・若松丈太郎氏は、この言葉で〈3.11という出来事〉の本質を、底の底から、過去と現在と未来を貫いて、明らかにした。

若松氏は原発を〈核発電〉、原発事故を〈核災〉と表現する。〈核爆弾〉と〈核発電〉は同根だからだ。そして原発事故は空間的にも、時間的にも広範囲に影響を及ぼす〈核による構造的な人災〉との認識から、〈核災〉という結晶語を世に送り出したのだ。

本書は、この強じんな思想と論理が凝縮された言葉で3.11以前／後の日本社会を凝視する。そして、恥知らずなほどの差別によって、地域住民や生活弱者、子どもたちが〈棄民〉されている実態を透視している。その告発は、核災棄民が福島に終らないということに集約される。

本書でわたしが戦慄したのは、若松氏が核災8年後のチェルノブイリを視察した章（2001、2年執筆）だ。キエフの病院でのガイダンス。事故後初期段階で年長者と妊婦に精神的な影響。1年半から2年で貧血症状を示す妊婦の増加と骨髄や神経に異常がある子どもの出生。3年過ぎから子どもに甲状腺障害が出現し……。福島からの核災は始まったばかりなのだ。若松氏はこの章にチェルノブイリと福島、日本と世界を重ねた不幸な予言を記している。

「自分は本当は難民なのではないか。本当は殺戮者ではないのか。ほんとうは死者ではないのか。なにひとつ確かなことはない。なにひとつ確かなことはない」

予言は現実になった。絶望のないまを見つめつくし、遠くにとどく言葉で人びとを結びあわす本書は、深い思索による希望の書である。前著『福島原発難民』もあわせて読んでほしいと願う。なお本書には、若松氏の詩に加藤登紀子氏が作曲し歌う「神隠しされた街」のCDが付属する。

と紹介されています。